

四月総評 立花開

はちみつに混じる空気のような嘘

甘くて粘度の高い、はちみつ。純度が高く美しいほどに気泡がよく見える。けれど、美しさを極めると、その中の異物まで美に内包される。どんなに醜い嘘も、極めてしまえば美しい。

赤子抱く

余分なものがしみぬよう

秋山颶汰朗 群馬県

「余分なもの」と決めることさえ、赤子にとっては「余分なもの」であるのに、何から守ろうとする。愛と言いかれば、どんなものも愛である。けれど、そんな思いとは裏腹に、余分なものはその子の養分となり、生きる力となつていくのだ。

妹の右目に星を活けていく

塩見 佯 沖縄県

これもまた、愛といえば愛となるのだろう。意図を含んでいないであろう行為のわからなさに、独占の想いが色濃く含まれているのだけがわかる。「活ける」とは活け花などに使われる言葉。星をいくつも活けられ右目の本来の機能は失われていく。その助けを主体がするのだろう。

そっと死ぬはつきりと死ぬ虹の君

池田 彩乃 青森県

死んだあとの姿はみな同じである。どうして死んだかがわかるだけ。眠るように死んでも、激しさの中で死んでも、死んだあとは同じになる。どのような生き方をしても、死に様は不平等で無慈悲だ。結句「虹の君」はその無慈悲さを受け取るしかない我々が自らにかける慰めだ。

譜面台を持つてきて置く青嵐

azusa 京都府

譜面台は、おそらく折り畳み式の不安定なもの。骨ばっていて、使用者の癖で壊れる箇所が決まるその姿は非常に不安定だ。心も、そうなのかもしれない。譜面台を置くときの眼差しの中に青嵐がある。いつか落ち着く、けれど今は真っ只中であるのだ。

思い出の

皮を剥かれて

死ぬイチジク

中立 明子 熊本県

死は二つある、といわれる。肉体の死と誰かから忘れられる死である。主体は記憶にも肉体がある、と感じた。記憶が持つ、果実としての肉体。思い出の皮は剥きやすく、甘く香しい果肉が姿を現す。味わう代わりに、思い出が死ぬのだ。

生まれたことの復習として配線を

臓器のように上手くしまった

芭川良 東京都

コード類は工夫次第で機能的に美しく収納もできるし、煩雑にしまい必要な時に時間をかけ取り出す、という非効率なやり方もできる。機能的な収納は経験によつて培われていく。生まれる前に臓器を収納した経験が記憶にある、という前提やコード類と臓器を同じものとして扱うことのアンバランスさが面白い。

あたたかい言葉をたべる

わたしは、人を産んだことがある

青野 椰栄 東京都

妊娠・出産とは人間を産み落とすことだが、言葉にすることで事実以上の力を感じてしまう。そして、その事実は主体を何物からも守ることのできる信仰となつていて、それが恐ろしい。「わたしは、」の区切りは選民意識的な浅ましさはないが、無垢ゆえの底知れない何かがある。

いまは

読み飛ばされてしまう

ここりでいいよ

こはくいろ 大阪府

「いまは」に今にも千切れそうな張り詰めた心を感じる。今を乗り越えれば大丈夫になるはず、という終着点のない何かを信じ続ける。信じ続けてしまう。けれど、今読まれなければ読まることなんてないのだ。「こころ」というなまものに「今」以外の時間を与えてはいけない。

花吹雪わされるひとの傍はいい

蝸牛 奈良県

人間の最も苦しいものは記憶が残ることだ。けれど、一度持つた記憶を忘れることが苦しい。何をしたところで、記憶を持つことも忘れることが痛いのだ。だから、始めから覚えておく機能のない人の傍は、主体にとつて救いとなつたのかもしれない。「わすれるひ

と」 というひらがな表記に、そこには刹那的な優しさしかないが、しかしそれこそが何よりも優しいのだと伝わってくる。